

# 「日本語表現法」自己PRコンテスト結果からみる話し方の評定について ～第三回の結果より～

高木香与呼

## 1. はじめに

今年度で開設9年目を迎えた「日本語表現法」では、2014年度より「自己PRコンテスト」を開催している。2016年度は、第3回自己PRコンテストを8月5日に本校で開催した。

この結果では、教員の良いと思った発表者と学生の良いと思った発表者が違っていた。これまでではほぼ一致しており、この結果は初めてのことである。

このことを受けて、教員の審査シートの記録をもとに、話し方が評定に与える要素について考える。

## 2. 自己PRコンテスト実施の概要

本校の「日本語表現法Ⅰ」は、読む・書く・話す・聞くの基礎的な日本語能力を、実用的に運用できるようにすることを目的としている。特に春学期の日本語表現法Ⅰでは、具体的に物事をわかりやすく説明できるようにすることと、パブリックスピーキングの要点を習得することに重点を置いている。その総仕上げとして、自己PRコンテストを学期末に行なっており、今回で三回目を迎えた。

一年全員が集まり、一組から四組とMSEクラスより各三名ずつ合計十五名、一分程度の自己PRを発表する。教員六名（持ち点各20点、複数人に分配できる、合計120点）と、発表者以外の学生（持ち点各1点、合計150点）の投票により順位を決定する。

学生・教員ともに、審査は審査用紙の項目にそって各発表者を評価する。評価の項目は、

- 1 全体のインパクト（印象）について
- 2 内容について
- 3 発声、発音について
- 4 表現力、態度について
- 5 説得力について

以上の五項目である。

一人の発表者につき、この五項目をそれぞれ1～5点で評価する。その合計がその発表者の総合評価点になる。

全員の発表後、この総合評価点をもとに、学生が一番良かったと思う者1名に投票する。教員は持ち点の20点を自由に分配できる。

### 3. 発表学生の内容と印象

各学生の発表内容と、話した時の印象をまとめる。

番号は発表順。挨拶→名前→題→本文の順に発表する決まりで行われた。

発表者は全員、事前に発表内容を作成し、担当教員のチェックを受けることが義務付けられている。

なお、留学生にはその旨を番号の後に加筆した。そして、本文後に、参考のため筆者の印象も「※話し方」としてつけた。

#### 発表番号1

ばか真面目が私の強みです。

私は、小学三年生から父の勧めでゴルフを始めました。高校では、ゴルフ部に入部しました。1年生の10月に初めて試合に出場しましたが、結果はスコア110と最悪でした。社会に出たときに履歴書にゴルフ部だったのにへたくそだと恥ずかしい思いをするので、試合の後からは、必死に練習しました。

3年生になり7月最後の試合に向けて、日々練習に明け暮れていました。ですが、自転車事故で左腕が思うように動かなくなってしまいました。もちろん、練習も思うようにできません。試合も諦めたくなかった私は、腕をかばいながら、練習だけは続けました。

よくも悪くもばか真面目な性格です。

そのかいあってか、ずっと切れなかったスコアの100の壁を大幅に突破して、94と言う成績で終わることができました。この不器用も悪いことばかりではないと感じられた出来事です。

短所は長所に思えた私は、これからもばか真面目にいろいろな壁を越えていくつもりです。

※話し方 発表が1番ということもあり、緊張から表情はかたく、声も震え気味。無意味な動きはなかった。途中コメントを忘れて止まったが、頑張っって思い出し最後まで続けられた。

#### 発表番号2 (留学生)

「得意な語学で日中関係を改善したい」と考えています。

私は、幼い頃からずっと語学が好きです。小学校の時も、暇があればいつも本を読んでいました。おかげで、学校の朗読コンテストで3回も受賞しました。そして、読むだけでなく、書きたいと思うようになりました。感じたことや感情を文字で伝えたいと思い始めたのです。そんな

時、中国の詩人である徐志摩さんの詩に会いました。すぐに詩の魅力に惹きつけられ書き始めました。高校の同級生に同じ思いの人がいたので2人で毎日詩を交換しました。詩と出会ったことで大親友とも出会えたのです。

ある日彼女が「花盛りの君へ」と言う日本ドラマを紹介してくれました。このドラマをきっかけで日本と日本語が好きになりました。だから、大学は日本語学部に進みました。日本語先生の授業を受けて、文節や品詞などの文法を勉強して、日本語の面白さを見つけました。例えば、「時間があつたら行く」と「時間があれば行く」この2つの文は、同じ仮定形ですけど、「たら」を使えば話す人は「本当に行きたい」と言う気持ちがあるが、「ば」の場合は「あまり行きたくない」と思っているのです。ほぼ同じ文の間にこんなに大きな違いがあることに、日本語は面白いと感じました。

また、学校で日本語クラブの部長も務めました。このクラブは日本の先生や学生と日本語学部の学生との交流会を開きます。私は毎回通訳を担当しました。それを見て、先生が日本語通訳のアルバイトを紹介してくれました。

自分の気持ちを文章にすること、日本語を勉強すること、通訳すること、これらのことをしているうちに、日本人と中国人は、それぞれにたくさんの誤解があるとわかってきました。そして、それを改善できる方法も見つけたのです。それは、通訳として、日本人に中国人の本当の思いや魅力を伝えることです。また同時に、中国人に日本人の本当の思いを伝えることです。そうすれば、日中関係は今より改善されるのではないのでしょうか。

私は、自分の得意な語学力を日中関係の改善に役立ってたいと思っています。

※話し方 終始堂々としているが、少々うろろうろとしていた。声はしっかり出ていて暗記もしていた。途中口ごもったが、挽回した。全体的に慣れている感じ。

### 発表番号 3

「あきらめません取れるまで」

私の将来の夢は自動車整備士になることです。小学校の頃から車が大好きでした。どうせ仕事をするなら好きなことをしたいと高校生の頃には思うようになってきました。それなら自動車に関わる仕事、整備士になろうと思いました。しかし、資格がないと働くことができません。それを取得するために、中日本自動車短大に入学しました。ただ、高校は普通科の学校でした。そのため、短大に入学してから、本格的に車の勉強が始まりました。当然ですが、わからないことばかりです。実習では、ミスや失敗が何回もありました。そのたびに悔しい思いをし、諦めかけたこともありました。それでも、整備士になりたい。ここでやめたら終わってしまいます。この経験から、挫けず粘り強くやり続ける気持ちが生まれ、今も続いています。この気持ちは、社会に出てからも役立つと思います。整備士になれるよう、これからも走り続けます。

※話し方 声が小さく、淡々とした話し方。抑揚がない。暗記もまばらで、聴衆のほうをあまり見ることができなかった。無駄な動きはなし。

#### 発表番号 4

高校時代の体育では、特にサッカーが好きでした。あの広いコートで30分間1度も止まることなく走り続けられたのは、市内マラソン大会で区間賞をとった持ち前の持久力があったからです。私はサッカー部ではありません。しかし、ゴールの角ギリギリに、シュートが打てるのが自慢です。体育のサッカーを終え、自分の部活であるバスケットボールとは違うと感じました。大人数でやるスポーツは、チームワークが大切です。私はサッカーでは、リーダーとしてコート内で励ましの言葉をかけ、チームを引っ張りました。チームをまとめる力は社会に出て部下ができたときに必要になると思うので、これからも大人数でやるスポーツはやり、まとめる力をつけていきたいです。

※話し方 暗記しておらず、読み上げる印象。ほとんど聴衆を見ることもなかった。無駄な動きはない。

#### 発表番号 5

挨拶で幸せをつかみます。

私は、中学の時野球部で頑張ったおかげでレギュラーになれました。その時、監督とコーチに礼儀を少しずつ教えてもらったので、その時から誰にでも挨拶ができるようになりました。

私はもともと人と関わるのが好きです。だから以前働いた会社でも、自然に挨拶ができました。礼儀を持って人と関われば、良い人間関係が築けるのだとわかりました。

これからも周りの人に明るくあいさつをして交流を深め、さらに、勉強もがんばります。そして楽しい社会生活を送るつもりです。

※話し方 挨拶と名前は笑顔でしていたが、中身は終始紙を読み、抑揚もない。姿勢もまっすぐではなく、演壇にもたれかかるときも。だらだらした印象。

#### 発表番号 6

今度こそ夢を実現させます。

私は高校で野球をやっていました。先生や先輩に礼儀をしっかりとしないといけないので礼儀を学びました。

練習はとてつもないので、1時間ぶっ続けのノックやベース間を全力疾走する連続ランニングなどのきつい練習をしました。勝つためそしてみんなのために乗り越えることができました。夏

の大会で1つでも多く勝つため、毎日練習があり、休みも少なかったです。でも夏の大会では勝てませんでした。ただ目標達成するためには簡単なことでは無い事、そしてものすごく時間がかかることを学びました。

現実が甘くなく、努力が必ず実るわけでもないことを痛感しました。今私は整備士を目指しています。必ず合格するために、気を抜かず勉強しています。今度こそ目標を達成します。

※話し方 声が小さくぼそぼそ紙を読む印象で抑揚に乏しい。姿勢は一定だが、ほとんど聴衆を見ない。

#### 発表番号7

「自分で考える滑り」

私は幼い頃からスキーをしています。私が今まで続けている理由は、自然の中で自由に滑ることと、スピードをコントロールしながら斜面を滑り降りることが楽しいからです。そして好きでやってきた中で二級まで取れたのですが、私は15歳の時に壁にぶつかったのです。それは、今までなんとなく好きだから続けてきて上手になっていただけだったのですが、いざ一級を目指そうとしたときにどうしても今までしてきたことではうまくいかなくなりました。理由は、人に教えられたことを、そのままトレースしていただけだったからです。それがわかった私は、自分で考え行動することでこれからは上手くなって行こうと決めました。またそうした行動の中で、今自分が何のために、何を最終的に目指しているのかを自覚できるようになりました。今でもまだ私は一級を取っていません。ただ私は一回一回の滑りに目標を立てて、その滑りを後で振り返ることで、今までよりも確実に滑りが進歩していると実感できるようになりました。今ではこの経験を生かして他のことも自分で考え行動を計画し実行出来るようになってきたと思います。

※話し方 基本は笑顔だが、緊張で少々硬い表情。体の動きは特にない。抑揚もあまりなく、スピードは少し速い。聴衆を見ようと努力している。ところどころ暗記していない。

#### 発表番号8 (留学生)

私はスリランカでもスポーツで有名な高校でラグビーをしていました。この高校は国内でのスポーツランクが4クラスある内のAクラスでした。

私は13歳からラグビーを始めましたが15歳になっても学校のBチームでした。2年間かかってAチームのレギュラーメンバーにはなれませんでした。

ラグビーは強さだけではなく状況に応じた判断力それに対応できる柔軟性がないとトップクラスのレギュラーメンバーになりません。

15歳から指導者の勧めで先輩との猛練習で2年後に何とかレギュラーメンバーの仲間入りをし

ました。

この経験は今後どんな状況でも自分で考えその場に合った行動ができるようになったと思います。

また柔軟な対応力で社会に出ても役にたつことができると自負しています。

※話し方 姿勢はよい。声は出ているが発音がわかりにくい。あまり暗記していない。スピードが少し早い。

#### 発表番号9

私は将来自動車車体整備士になりたいと思っています。

私は小学校の頃古い自転車のライトの配線をつないだり、フェンダーのサビを取ったりして直しながら乗っていました。

私は物を直したり、作ったりすることが好きです。

自動車の車体整備においても金属を曲げたり、伸ばしたりする作業が必要とされます。自分が好きな作業を仕事にすることができるメリットのほかに、車体に傷がついたり、凹んだりした時、部品ごと変えるのではなく、再利用、再使用、ゴミの発生抑制が実現できるというメリットがあり、資源を大切にする3Rで社会に貢献できると思います。

このようにして私は社会貢献したいと思います。

※話し方 机にもたれかかる姿勢。少々落ち着きがない。暗記していないので紙から目が離せない。声も小さくスピードも速く、抑揚もほとんどない。

#### 発表番号10

社会人としての礼儀には自信があります。

私は仕事をした経験があるからです。3年間航空自衛隊で勤務していました。短い期間でしたが航空機整備員として沖縄で勤務していました。

厳しい暑さの中、体力錬成として、筋力トレーニングや駆け足など毎日90分以上実施していました。さらに整備業務もあるため、体力と忍耐力に自信ができました。

また私は自衛官としてだけでなく、社会人として必要な一般常識や礼節も身に付けています。つまり、立派な社会人に見られるようにと厳しく指導を受けてきているのです。

だからこの学校を卒業し就職した後も、相応の立ち居振る舞いができる自信があります。

自衛隊仕込みの体力と精神力そして社会人力で今後も仕事に励んでいきます。

※話し方 暗記している。声は大きくはないが、聴衆を見て落ち着いてゆっくり話している。表

高木香と呼：「日本語表現法」自己PR コンテスト結果からみる話し方の評定について

情に緊張感がみられる。まっすぐな姿勢。

#### 発表番号11（留学生）

優しい人間だと思います。

私はサッカーが好きで自分でもするし、テレビでもよく見ます。世界で1番人気のあるサッカーは見ていても面白いです。

いろいろなチームの中で私はベトナムのチームが1番好きです。

とても強いわけではありません。

ただ、とても優しいプレーをするのです。

どんなやさしさかと言うと、選手が怪我をしないような配慮があるプレーだからです。

ずっと前、私はよく怒っていました。怒ると人を傷つけることがわかりそれ以来おこらないようにしています。

人に優しくするとやさしさが返ってきます。

サッカーも優しい配慮があれば素晴らしいチームになります。

これからもどんどん優しくなって人の心を怪我させない配慮のある人になろうと思っています。

※話し方 スピードがやや速く、発音が時々不明瞭なため内容がわかりにくい。聴衆を時々見られる。演壇に手をつくなど落ち着きがない。暗記が完璧でないため、時々紙を見る。

#### 発表番号12（留学生）

言葉を通して世界中の人とコミュニケーションします。

私はスリランカ人です。外国語を勉強するのが大好きです。だからどこでもいつでも外国人に会った時は、その人の母国語を聞きます。そして、その言葉を勉強して覚えようとしています。これまでにシンハラ語、英語、日本語ができるようになりました。この3つは仕事ができるレベルです。隣の国インドのヒンドゥー語は話せませんが聞いて内容が大体わかります。その他にもベトナム語、ネパール語、中国語も日本語学校の友達から単語などを教えてもらい、覚えようとしています。その国の言葉を勉強すると外国人とすぐに友達になれます。それが楽しいいろいろな他の国の文化を知ることもできます。今私には500人以上の外国の友達がいます。言葉ができると知識も世界も広がります。これからもいろいろな国の友達と仲良くしていき、社会でそれを役立てます。

※話し方 暗記している。声がしっかり出ていてスピードもゆっくりで聞きやすい。聴衆をちゃんと見て笑顔もある。ボディランゲージも内容に合わせてできた。時々つかえる

が何とか最後まで話す。

### 発表番号13

私の強みは「何事にも前向きに取り組むこと」です。

高校3年生の時に先生に指名されて自動車の整備技術を競う大会に出場することになりました。自分は人前で何かをすることが得意ではなかったので、はじめは嫌だなと思いました。大会当日までに2ヶ月しかなかったのですが、先生と3位入賞すると目標を立てたので毎日遅くまで練習をがんばりました。いざ大会に出場すると結果は惨敗でした。ですが、出場してみて達成感や充実感、人前で何かをすることに対する免疫ができ、自分自身が成長したように感じました。このことから前向きに取り組むことの大切さを学びました。

※話し方 落ち着いていてしっかり暗記している。聴衆も見られた。声も出ている。抑揚があまりない。可もなく不可もない印象。

### 発表番号14 (留学生)

◇ 記録の提出がなく、内容の記載ができない。

※話し方 しっかり暗記している。聴衆もしっかり見られている。発音も良く声も出ていて、ゆっくり話し落ち着いている。抑揚もある。緊張からか途中忘れるが、自分で回復し最後までしっかり話す。

### 発表番号15

僕は、頼まれたことを責任を持って取り組む人間です。高校3年生の時、自分のクラスで学校行事の係りを担任の先生から任されました。僕は普段からみんなを引っ張っていくタイプの人間ではなかったので正直困りました。しかし先生から君ならできると言われたので、係をすることを決意しました。係りをしてみると、想像以上に自分の仕事の量が多く、また、クラス全員をまとめることが非常に難しく、言い争いになったりもしましたが、一人一人としっかり向き合って話を聞いて行ったところ、最後にはクラスがまとまり、学校行事で優秀賞をとりました。この経験から、最後まで諦めずに取り組めば必ず結果はついてくる、最後まで物事をしっかり取り組む大切さを学びました。

※話し方 暗記していて、ゆっくり話しているが、緊張からか棒読みの感が否めない。聴衆も見ているが、抑揚があまりなかった。余分な動きはない。



以上が、発表者15名の発表内容と、発表時の印象である。

担当教員のチェックは、事前に最低一回。文章と話し方の両方をチェックする。

希望者には二回目や三回目のチェックもした。

指導の要点は、最初に短く自分のPRの中身のキャッチフレーズがあり、そのあとにそれを具体例を入れて説明し、最後にまとめとして、得られたことやできることを書くようにという指示。

分量は一分程度（400字程度）と決めてあったが、この部分の指導は、実際の就職活動でも、それほど厳しくないため、内容が具体的に表現されていれば拘らないことにしてある。

#### 4. 審査結果から

次に、今回のコンテストの審査最終集計表を見る（表1）。表1の発表番号2、4、10、12、14番で大きく学生点と教員点に違いがある。

その中でも2番と4番では、学生点は高いが教員点は高くない。逆に12番と14番は教員点が高いのに、学生点は低い。平均して点を取っているのは7番だけである。

学生点はややもすると仲間意識や印象に左右されやすい傾向がある。そして、真面目に聞いていない学生もいることを考慮に入れる必要があるだろう。ただ印象を決定する要素には感じの良さやその人物を好ましいと思わせることも重要であるだけに、軽視はできない。教員点においても、発表学生の日頃の授業態度が全く影響していないとは言い切れないだろう。

表1

自己PRコンテスト審査最終集計表					
クラス	発表番号	点数1 学生点	点数2 教員点	合計	賞
1	1	4	7	11	
1	2	25	9	34	優秀賞 3位
1	3	4	4	8	
2	4	20	1	21	
2	5	6	1	7	
2	6	4	1	5	
3	7	17	13	30	努力賞 4位
3	8	9	2	11	
3	9	6	2	8	
4	10	25	17	42	最優秀賞 1位
4	11	3	6	9	
4	12	7	18	25	努力賞 5位
MSE	13	5	4	9	
MSE	14	8	28	38	優秀賞 2位
MSE	15	7	7	14	

内容で共感が得られそうな、整備士を目指す動機を話している3番と9番では、学生はもとより教員点も獲得していない。内容の前に暗記や態度、声の大きさや話速に問題があったのだと考えられる。

次に挙げる表2と表3は、6人の教員の審査シートをもとに、教員審査の詳細をまとめたものである。

表2では評価1のところマークしてあり、表3では評価5のところマークしてある。

表2でまず顕著なことは、評価1が極端に少ないということである。表3を見るとわかることだが、最高の評価5をつけることはできても、最低の評価1をつけるのは判断しにくいことを表していると想像できる。今回のコンテストでも、評価1をつけた教員はAとFの二人のみであり、その数も全体で4個しかない。

さらに、表3の評価5についても、表2ほどではないが少ない。こちらも、教員BとEの二人は評価5をつけていない。たった6人の教員でさえ、最低と最高の評価基準の重さはずいぶんと違うことがわかる。

また、発表の順番も大いに評価点には影響する。

例えば1番の発表者には、5も1もない。比較する対象がないことと、今回は1番の学生がひたむきに話したこともあるだろう。それだけで印象が悪くない。弱い面には2が見られるが、好

表2 教員点項目別評価詳細1

教員	発表者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
	評価項目	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価
A	1	3	4	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	3	4	3
	2	3	3	3	3	3	4	4	3	3	4	3	4	4	5	4
	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	4	3
	4	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	3
	5	2	3	3	2	2	3	4	2	2	4	3	4	3	4	3
B	1	3	2	2	2	3	2	4	3	2	1	4	4	3	4	4
	2	4	3	3	3	3	2	3	2	3	3	4	3	3	3	2
	3	4	4	3	3	3	2	4	2	3	3	2	3	3	3	3
	4	3	3	4	3	2	2	3	2	2	3	3	2	3	3	3
	5	3	2	2	3	3	2	4	2	2	2	3	3	2	4	3
C	1	4	5	3	3	3	3	3	3	3	5	4	5	3	5	4
	2	4	4	3	3	3	3	3	3	3	4	5	4	4	4	4
	3	4	4	4	3	3	3	4	4	3	4	3	3	4	4	3
	4	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	3
	5	4	4	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	4	3
D	1	3	4	3	3	3	3	4	3	4	4	4	4	3	5	4
	2	4	4	4	3	4	3	5	3	4	5	4	4	4	5	4
	3	3	5	3	3	4	3	5	3	4	5	5	4	5	4	4
	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	5	4	4	3	4	3
	5	3	4	3	3	3	3	3	3	4	4	3	4	3	4	3
E	1	2	3	3	3	3	3	3	3	2	4	3	3	4	4	3
	2	3	4	4	3	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4
	3	4	4	3	3	3	4	3	3	4	4	3	3	3	4	4
	4	4	4	3	3	3	2	3	3	3	4	3	4	3	4	4
	5	2	3	4	2	2	2	2	2	2	3	3	4	3	4	4
F	1	2	3	2	2	1	1	4	3	4	5	4	4	3	5	3
	2	4	5	4	4	3	3	4	3	4	5	4	4	4	4	4
	3	4	5	3	3	2	2	4	3	4	5	4	5	4	5	3
	4	3	4	2	2	1	3	4	3	3	5	4	4	2	5	3
	5	4	5	4	3	2	2	5	3	3	5	4	5	4	4	3

印象の部分には4が付けられる。2番目の学生は堂々としている上に、暗記もほぼ完璧で訴える力が高かった。もし前の学生に4をつけたらそれ以上は5しかない。もし前が3でもはるかに上回っていればやはり5になる。学生点で一位をとった10番と並んで25票を獲得している。教員はすべての学生を公平に見ようと努力しながら見るが、学生は一人にしか投票できないため、印象の強さは、選ぶ時のとても大きな要因だろう。2番目の発表者以降7番、そして10番まで5が少ない原因もこの2番の印象の影響とも考えられる。

一位となった10番以降は、5の割合がぐっと増えている。審査員自身が審査に慣れてきて自分の基準が定まってきたこともある。そして一番の要因はしっかり準備している学生が多かったことだ。平均点で2ポイント台なのは13番のみにとどまっていることからわかる。

最後の学生も2番の学生の後の人たちと同様に14番の発表者の影響を受けている。14番の学生のインパクトが強かった影響で、内容も態度もそれほど悪くないのに、それまで出始めていた5が得られていない。これは低い点がないことからわかる。コンテストの場合は前後の発表者の影響を受けてしまう。

また、このコンテストでは審査時間もじっくりとれるわけではなく、次の発表者が始まるまでの数十秒の間に審査しなければならないことも、評価の1や5をつけにくい点であろう。

しかし、ばらつきがある評価点も平均をとるとやはり一つの傾向が見えてくる。

表3 教員点項目別評価詳細2

教員	発表者番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
	評価項目	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価
A	1	3	4	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	3	4	3
	2	3	3	3	3	3	4	4	3	3	4	3	4	4	5	4
	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	4	3
	4	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	3
	5	2	3	3	2	2	3	4	2	2	4	3	4	3	4	3
B	1	3	2	2	2	3	2	4	3	2	1	4	4	3	4	4
	2	4	3	3	3	3	2	3	3	2	3	3	4	3	3	2
	3	4	4	3	3	3	2	4	2	3	3	2	3	3	3	3
	4	3	3	4	3	2	2	3	2	2	3	3	2	3	3	3
	5	3	2	2	3	3	2	4	2	2	2	3	3	2	4	3
C	1	4	5	3	3	3	3	3	3	3	5	4	5	3	5	4
	2	4	4	3	3	3	3	3	3	3	4	5	4	4	4	4
	3	4	4	4	3	3	3	4	4	3	4	3	3	4	4	3
	4	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	3
	5	4	4	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	4	3
D	1	3	4	3	3	3	3	4	3	4	4	4	4	3	5	4
	2	4	4	4	3	4	3	5	3	4	5	4	4	4	5	4
	3	3	5	3	3	4	3	5	3	4	5	5	4	5	4	4
	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	5	4	4	3	4	3
	5	3	4	3	3	3	3	3	3	4	4	3	4	3	4	3
E	1	2	3	3	3	3	3	3	3	2	4	3	3	4	4	3
	2	3	4	4	3	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4
	3	4	4	3	3	3	4	3	3	4	4	3	3	3	4	4
	4	4	4	3	3	3	2	3	3	3	4	3	4	3	4	4
	5	2	3	4	2	2	2	2	2	2	3	3	4	3	4	4
F	1	2	3	2	2	1	1	4	3	4	5	4	4	3	5	3
	2	4	5	4	4	3	3	4	3	4	5	4	4	4	4	4
	3	4	5	3	3	2	2	4	3	4	5	4	5	4	5	3
	4	3	4	2	2	1	3	4	3	3	5	4	4	2	5	3
	5	4	5	4	3	2	2	5	3	3	5	4	5	4	4	3

表4に教員点の項目別平均を出した。平均点が4以上ある発表者はやはり上位入賞しているからだ。そして、四位入賞を果たした7番のように全項目において低い点を取らないということも重要な要素である。高得点は取れなくても、低い点を取らないことも必要だとわかる。ただし、この場合は強いインパクトを相手に残すことができない。いわゆる可もなく不可もなくという状態である。安全な分トップを狙うこともむづかしくなる。

このコンテストでは、教員だけでなく、学生点も得られなければ上位には入ることができない。

今回は学生150人分の詳細な評価記録を保存していないのでわかりかねるが、6人の教員だけの記録からわかるように、同じものはなくとも平均すれば似たような結果が得られるだろう。なぜなら、教員は自分の審査点が20点あり分配ができる。分配法も自由であるのに対して、学生一人の持つ審査点は1点しかないからだ。たとえ3人が同じようにいいと評価していても、一人にしか点をつけられないからである。

審査結果の最後に、教員別の評価合計と審査点結果の詳細を見る(表5)。教員ごとに評価点合計の高い順に審査点の下段に①②③とつけた。この表からは、教員それぞれの20点の分配方法がわかる。

教員Aは、一番評価点の多い発表者に持ち点の10点をつけ、2番目以降5点3点2点となっ

表4 教員点項目別評価平均

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1平均	2.83	3.50	2.67	2.67	2.67	2.50	3.67	3.00	3.00	3.67	3.67	4.00	3.17	4.50	3.50
2平均	3.67	3.83	3.50	3.17	3.33	3.17	3.83	3.00	3.33	4.17	3.83	4.00	3.83	4.17	3.67
3平均	3.67	4.17	3.17	3.00	3.00	2.83	3.83	2.83	3.50	4.00	3.33	3.50	3.67	4.00	3.33
4平均	3.17	3.50	2.83	2.83	2.50	2.67	3.17	2.83	2.83	3.83	3.33	3.67	2.83	4.00	3.17
5平均	3.00	3.50	3.17	2.67	2.50	2.50	3.67	2.50	2.67	3.50	3.17	3.83	3.00	4.00	3.17
1~5平均	3.27	3.70	3.07	2.87	2.80	2.73	3.63	2.83	3.07	3.83	3.47	3.80	3.30	4.13	3.37

表5 教員点項目別評価合計と審査点まとめ

教員	発表者番号 評価項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
		評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価
A	評価点数 2.5点満点(5×5)	14	16	14	14	14	16	18	13	14	17	15	19	16	21	16
	審査点 ・持ち点20点、							③			2		②		①	
B	評価点数 2.5点満点(5×5)	17	14	14	14	14	10	18	12	11	12	15	16	14	17	15
	審査点 ・持ち点20点、	4						5				1	4		5	1
C	評価点数 2.5点満点(5×5)	19	21	16	15	15	15	17	16	15	19	18	19	17	21	17
	審査点 ・持ち点20点、 順位	2	2	2				1	1	1	2	2	2	2	2	1
D	評価点数 2.5点満点(5×5)	16	20	16	15	17	15	20	15	19	23	20	20	18	22	18
	審査点 ・持ち点20点、 順位	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
E	評価点数 2.5点満点(5×5)	15	18	17	14	15	15	15	14	15	19	16	18	17	20	19
	審査点 ・持ち点20点、 順位	3	1								4		3	1	4	4
F	評価点数 2.5点満点(5×5)	17	22	15	14	9	11	21	15	18	25	20	22	17	23	16
	審査点 ・持ち点20点、 順位	3						3			5	2	3		4	
教員点平均		16.33	18.50	15.33	14.33	14.00	13.67	18.17	14.17	15.33	19.17	17.33	19.00	16.50	20.67	16.83
教員審査点合計		7	9	4	1	1	1	13	2	2	17	6	18	4	28	7
学生点		4	25	4	20	6	4	17	9	6	25	3	7	5	8	7
総合計		11	34	8	21	7	5	30	11	8	42	9	25	9	36	14
順位			③					④			①		⑤		②	計

ている。

教員 B は、最高評価点のものは 5 点の審査点になっている。

教員 C は、評価点上位 8 人に 2 点ずつ、その下 4 人に 1 点ずつつけている。

教員 D は、1 位と 2 位がそれぞれ、4 点 3 点で、残り全員に 1 点となっている。

教員 E は、上位 3 名にそれぞれ 4 点。その後評価点の高い順に 3 点と 1 点をつけている。

教員 D は、1 位に 5 点、2 位に 4 点 3 位に 3 点。その後、評価点の高い順に 3 点 2 点となっている。

総合評価の評価点の高いものを重要と見るか、評価点の差はあくまで微妙な点差であるため、広く点を分配するかの違いである。このように、教員によって点のつけ方に大きな違いのある審査点ではあるものの、評価平均の時とほぼ同様な結果が出てきている。様々な観点や、価値観の相違があっても、マイナスが少なく、かつ高評価の多いものが上位から順になることがわかる。

## 5. ま と め

筆者の考えるパブリックスピーキングに必要な一般的スキルは、「態度」「話速」「発音」「発声」「表情」「内容」である。そして、「内容」を確実に伝えるためには、「態度」「話速」「発音」「発声」「表情」を調えることが必須である。このコンテストでは、発表者は全員、事前に発表内容の担当教員チェックを受けているため、少なくとも内容がわかりにくいというものはなく、それなりに主旨があり、その説明も具体的に表現されている。このことから審査点差は、「態度」「話速」「発音」「発声」「表情」の要素が大きく関わっているといえる。これは暗記していない学生の審査点が全体的に低いことからわかる。

一方、公正に思える審査にも、個人の考え方や評価の仕方には相当ばらつきがあることも分かった。今回は教員の審査用紙のみの分析であったが、学生に広げても感じ方の差は多少あれど、ばらつきは同じようなものだと想像する。それほど人の感じ方に正解を求めることはむづかしいのだ。

では、何をしても受け手の問題だから無駄かというところではない。やはり高評価を集める発表者は審査教員全員に共通しているからだ。

パブリックスピーキングにおいては、内容を伝えたいと望むのであれば、まず目に見える部分を重視することが非常に重要であるといえることが、評価点の分析から本稿で明らかになった。このことを今後の日本語表現法の授業でも引き続き習得させていきたい。また、そのことを学生たち自身に実感させるためにも、自己PR コンテストを今後も続ける必要があるだろう。

最後に、このコンテストを実施するにあたり、趣旨をご理解いただき、お忙しい中、快く審査のためにご協力いただいた、長谷川教授、高瀬教授、古川准教授、鈴木先生、楠本先生と、実施を支えていただいた教務の皆さまに感謝の意を表します。